

実践報告

ハワイ大学との国際交流プログラム ー米国 NP・大学院生との交流ー

International Exchange Program with University of Hawaii; Inviting a Nurse Practitioner/ Graduate Student

藤塚真希¹⁾

Maki Fujitsuka

佐藤朝美¹⁾

Tomomi Sato

杉村篤士²⁾

Atsushi Sugimura

赤瀬智子¹⁾

Tomoko Akase

キーワード: 国際交流、英語教育、看護教育、ナースプラクティショナー

Key Words: International exchange, English education, Nursing education, Nurse Practitioner

I. 緒言

大学教育では、近年の急速なグローバル化に伴い、豊かな語学力とコミュニケーション能力を持ち国際化に対応できる人材の育成が課題となっている(グローバル人材育成推進会議, 2012)。国際都市横浜にある横浜市立大学では「グローバルな視野を持ち活躍できる人材の育成」を目標に掲げ、実践的な英語教育を重視している。

看護学科の英語教育は、英語科目「Practical English(以下 PE)」を必修としており、ほとんどの看護学生が TOEFL-ITP500 点相当のスコアを取得している(McGary ら, 2019)。専門科目では、1 年次は外国人模擬患者に英語でバイタルサインを測定する「看護英語教育プログラム」を実施しており、臨床場面を想定した英語コミュニケーションの基礎的能力の向上に取り組んでいる(落合ら, 2018)。2 年次以降は、「国際看護学」において国際社会の多様な文化を越えた看護の役割を学習する。また、学生が PE で培った英語力をもとにグローバルな看護を学ぶ「フィリピンへの海外フィールドワーク」、海外の看護や看護教育を看護基礎教育・継続教育として本学附属 2 病院看護部と共に学ぶ「ハワイ看護研修」、その他の海外留学や国内の交流プログラムの企画・実施など、実践的英語教育の場を

拡充している。しかし、看護基礎教育・継続教育における実践的英語コミュニケーションの場は依然として少なく、多くの看護学生や看護師に国際交流プログラムの参加機会を提供し、横浜市立大学として国際看護の実践的能力を養成することが課題となっている。

そこで今回、看護師・看護学生を対象に、米国 Nurse Practitioner(以下 NP)の育成に取り組んでいるハワイ大学との国際交流プログラムを企画・実施した。このプログラムは、NP でありハワイ大学大学院生でもある講師との交流を通して、日本の看護師・看護学生が日米の看護の現状や課題を考えると共に、両校の相互交流および、看護教育・研究・実践を推進するものである。

NP の役割・実践は、日本においても近年注目されている。日本看護協会(2015)は、医療的な判断や実施は地域での安全・安心な療養生活に直結するとし、看護師の裁量権の拡大を掲げている。また、看護の基盤を持ちながら医師の指示のもと診療補助を行う「特定行為に係る看護師」がすでに法制化され、研修制度のある医行為を実施できる新たな裁量権を持った「診療看護師」の養成が検討されはじめた現状にある(厚生労働省, 2017)。一方、米国では NP は高度実践看護師として先駆的に育成され一定レベルの診断や治療・処方などを行うこ

Received: October. 31, 2019

Accepted: March. 3, 2020

1) 横浜市立大学医学部看護学科

2) 東海大学医学部看護学科

とができる。NP は医師と看護師の双方の視点からプライマリーケアを提供し、患者満足度の増加や再入院率を低下させるなど、米国の医療システムにおけるアウトカムを報告している (Julie et al., 2013)。

そこで本プログラムでは、第一に米国で活躍する NP と日本の看護師や看護学生の交流により国際社会における NP の役割・実践について見識を深め、看護師の役割をグローバルな観点から考えることを狙いとした。また、国際看護への興味関心を高めることで英語力の向上にも寄与できる。さらに、講師がハワイ大学大学院生として NP を取得後、博士課程に進学し実践と研究を重ねていることから、看護学生・看護師の国際的なキャリア開発へのロールモデルにもなると考えた。

本稿では、米国 NP でありハワイ大学大学院生でもある講師との国際交流プログラムの内容とその評価を報告し、今後の国際交流プログラム向上のための基礎資料とすることを目的とする。

II. 方法

1. プログラムの目的

米国 NP でありハワイ大学大学院生でもある講師との交流を通して、日本の看護師・看護学生が日米の看護の現状や課題を考えると共に、両校の相互交流および看護教育・研究・実践を推進する。

2. 日程

2019 年 3 月 4 日～7 日 (4 日間)

3. 招聘大学および招聘者

講師として、ハワイ大学大学院生の Miura 氏を招聘した。Miura 氏は、日本で看護学士号を取得し小児科での臨床経験後に渡米し、Family Nurse Practitioner (FNP) を取得した。現在はハワイ大学の Doctor of Nursing Practice (DNP) コースに在学しながら、オアフ島内にある Health Center にて産科婦人科ケアおよびプライマリーケアを提供している。今回は、日米での看護師経験がある Miura 氏が日本と米国の双方の視点から看護の現状と課題について情報提供し、相互交流を活発に行えるようにプログラムを構成した。

日程	実 施 内 容
1 日目	【病院視察】ICU、手術室、周麻酔期看護
	【公開講義】米国における NP の看護実践と教育
	【ディスカッション】日本における NP の実践
2 日目	【病院視察】NICU、産科病棟・外来
	【ワークショップ（看護師対象）】臨床での看護実践における倫理的判断
3 日目	【ワークショップ（学生対象）】医療英語を学ぶコツ！
	【講義（学生対象）】米国 NP としての看護実践とキャリア開発
	【懇親会】看護学科教員との交流
4 日目	【エクスカージョン】看護学科生との交流

図1 国際交流プログラムの概要

4. プログラムの実際

ハワイ看護研修を担当した教務部門長と小児看護学領域が中心となって、以下における病院視察、公開講義、看護師対象ワークショップ、学生対象ワークショップなどのプログラムを企画・実施した。(図 1) また、グローバル人材の育成を目的に設立された本学のグローバル都市協力研究センター (Global Cooperation Institute for Sustainable Cities, 以下 GCI) の公衆衛生ユニットの協力を得て実施した。

1) 病院視察

横浜市立大学附属病院と横浜市立大学附属市民総合医療センターの協力のもと、NP の活躍が期待される周産期分野や周麻酔期看護学分野の視察を組み入れた。

横浜市立大学附属病院の視察では、Miura 氏が手術室・集中治療室を見学し、米国と日本の麻酔管理や集中治療室における看護について医師・看護師・周麻酔期看護師と意見交換した。横浜市立大学市民総合医療センターの視察では、NICU・産科病棟・産科外来を見学し、日本と米国の医療体制や背景の違いについて産科医師・看護師と談論し、今後の日本の医療の展望についてもディスカッションした。



写真1 Miura 氏の産科・NICU 視察の様子

2) 公開講義「米国医療における NP の看護実践と教育」

米国における NP の歴史的背景や教育課程、看護師の行う診断、治療および看護実践について、Miura 氏の経験に基づいた講義を実施した。日本における NP の展望に関しては、日本における NP の育成や NP に求められる看護実践など、日米の文化的背景の相違をふまえて発展させる必要性をディスカッションした。



写真2 Miura 氏による公開講義の様子

3) 看護師対象ワークショップ「米国医療における NP の看護実践と教育」

横浜市立大学附属市民総合医療センターの小児看護専門看護師と検討し、臨床現場における倫理的課題に焦点を当てたワークショップを通じて日米の看護師の役割や相違点についてディスカッションを深めることを目標とした。

Miura 氏からは米国における NP の活動と、アメリカ看護協会が看護師の専門職としての倫理的価値や義務について表明している倫理規則である Code of Ethics for Nurses (American Nurses Association, 2015) の視点、実際の倫理的判断について情報提供があった。ディスカッションでは、Miura 氏から提示された臨床現場での倫理的な困難事例について日米の文化の違いをふまえながら、参加した看護師・大学院生と話し合うと共に倫理的判断のプロセスについて学んだ。参加者からは Code of Ethics for Nurses をどのように実践に活用するのか質問があり、実践的なディスカッションが繰り広げられた。

4) 学生対象ワークショップ「医療英語を学ぶコツ！」

学生の医療英語の学習を支援することを目的にワークショップを行い、医療英単語に関するクイズを用いて学生が積極的に参加できるような形式とした。さらに、Miura 氏の経験から、留学先で必要な医療英語の効果的な学習方法の講義と演習を実施した。学生は医療英語の難しさを実感すると共に Miura 氏の実践的なアドバイスに熱心に耳を傾けていた。積極的に質問する学生も多くみられ、医療英語を身近に感じ学ぶことができていた。



写真3 ワークショップにて学生が Miura 氏に質問する様子

5) 学生対象の講義「米国 NP としての実践とキャリア開発」

学生自身のキャリア展望をサポートすることを目的に、Miura 氏からキャリア開発についての講義を実施した。Miura 氏が NP としてどのように自身のキャリアを考え、積み重ねてきたのか、等の長期的な視野をもったキャリア開発について情報提供があった。

5. プログラムの評価

各プログラム実施後、参加者を対象にアンケート調査を行った。アンケートの内容はプログラムの目的の評価とし、全対象者には米国の看護の現状や課題である「NP の役割」や「NP の

看護実践」について理解できたかを質問した。さらに一般公開プログラムでは、参加者がディスカッションを通して「日本における NP の実践」について考えることができたかを問う項目を設けた。看護師対象ワークショップでは、参加した看護師・大学院生が「米国における倫理原則」について理解でき、「臨床場面での倫理的課題の解決に役立てられる」と感じたかを質問した。看護学生対象プログラムでは、学生が「医療英語への興味」を持ち、「勉強方法の理解」ができたかを質問した。「今後のキャリア」を考える上でも、学生が参考になったと感じたかを問う項目を設けた。回答は、「とても思う」から「全く思わない」までの 5 段階のリッカート方式とし、自由記述欄も設けた。

自由記述の分析の過程では、文脈単位で 1 単位とし抽出し、1 単位ごとに意味内容を表すコード名をつけ、類似性を考慮した上でサブカテゴリー、カテゴリー化した。分析の過程においては、看護学を専門とする研究者間での解釈が安定するまで検討を行った。

6. 倫理的配慮

アンケートはプログラムの評価に用いること、回答は自由意思であること、個人情報の保護を徹底することについて、文書と口頭にて説明を行った。アンケート内の同意のチェックをもって、協力が得られたと判断した。

また、プログラム中の写真撮影に関しては、プライバシーの保護について口頭で説明し、写真撮影と掲載の可否を事前に確認した。

III. 結果

参加者については、看護師 47 名（認定看護師 2 名、専門看護師 4 名、特定行為に係る看護師 2 名含む）、教員 38 名、学生 61 名（学部 43 名、大学院 18 名）の計 146 名であった（重複あり）。アンケートは 104 部配布し、そのうち 95 部を回収した（回収率 91.3%）。アンケート回答者の背景については、表 1 に示す。

表1 回答者の背景

		n=95
項目	人数	%
<属性>		
看護師	30	31.6
専門看護師	4	
認定看護師	2	
特定看護師	2	
看護学科生	32	33.7
1年	7	
2年	4	
3年	21	
大学院生	18	18.9
教員	14	14.7
<参加動機（複数回答）>		
NPへの興味	43	45.3
国際看護への興味	37	38.9
講師の講義を希望	29	30.5
上司・知人の勧め	27	28.4
無回答を除く		

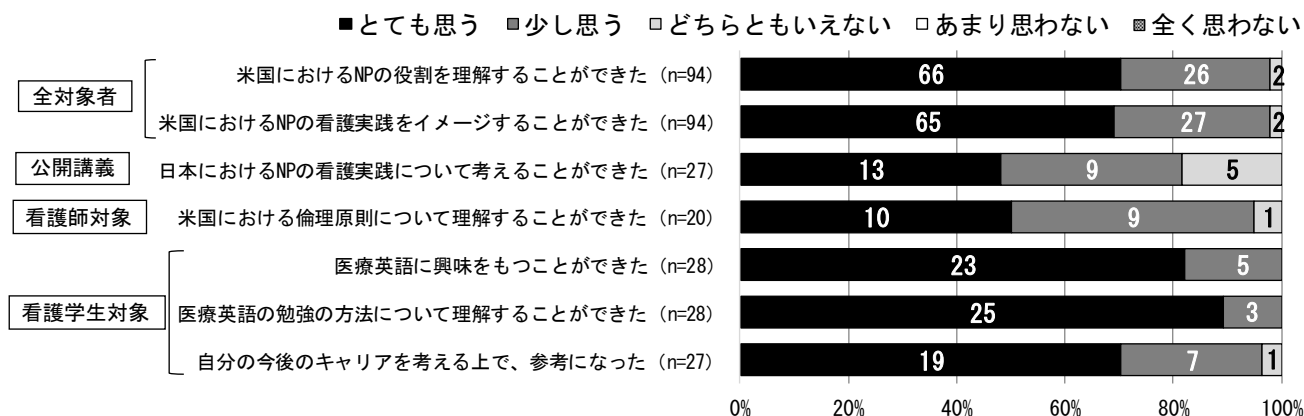


図2 対象者別プログラムの評価得点

アンケートによる各プログラムの評価得点については、図2に示す。「米国におけるNPの役割の理解を理解することができた」「米国におけるNPの看護実践のイメージすることができた」では、92名(96.8%)がとても思う・少し思うと回答した。また、「日本におけるNPの看護実践について考えることができた」に関しては22名(81.5%)がとても思う・少し思うと回答した。自由記述においては25名が記載しており、【日本におけるNPの専門性】、【日本におけるNPのニーズ】、【NPの看護実践に必要なこと】、【NPへの期待】の4カテゴリーが、10サブカテゴリー、58コードにより抽出された(表2)。

看護師対象ワークショップにおいては、「米国における倫理原則について理解することができた」について19名(95.0%)が

とても思う・少し思うと回答した。「臨床場面での倫理的課題の解決に役立てられると思ったこと」については12名が記載しており、【倫理的課題に気づく】、【倫理原則の活用】、【看護師としての倫理観】の3カテゴリーが、18コードにより抽出された(表3)。

学生対象プログラムにおいては、「自身のキャリア開発について考えることができた」について26名(92.9%)がとても思う・少し思うと回答した。自由記述においては15名が記載しており、【キャリアの視野の拡大】、【キャリア展望の準備】の2カテゴリーが、5サブカテゴリー、20コードにより抽出された(表4)。

表2 日本におけるNPの看護実践について考えることができたこと

n=25

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
日本におけるNPの専門性	看護の専門性をもつこと	専門職として自分で考え、自分で判断する姿勢が求められる
		看護師としての専門性をどう確立するか、看護実践のキーであると感じた
		「看護」の視点をもって診察することの重要性についても訴えていく必要がある
	医師との役割分担	医師との棲み分けにおける米国と日本の違い 医療行為に踏み込んでいる業務内容も多く、医師との立場をどう区別するか
日本におけるNPのニーズ	他のエキスパートナースとの違い	CNSも38単位へと移行しようとしていることから、今後のあり方を考えていきたい 准看、認定、専門、特定行為や資格が混乱している
		米国のやり方をそのまま日本に導入することは困難であり、検討が必要だと思った
	日米の背景の相違	社会背景により求められる看護師の役割が変化する 医師不足は日本でもアメリカと同様大きな問題であり、NPの需要は日本でも大きいと思う
		NPのニーズ ニーズに沿ってNPを普及させていくことが大切だ ニーズにより求められる看護師の役割が変化する
NPの看護実践に必要なこと	法律・制度の整備	処方や診断など、日本では医療法や医師法など法的な限界がある 看護師の職務範囲に関する法改正の必要性
		フィジカルアセスメントで異常を発見しても処方権がなく、医師に報告後の処置になる
	医療者の理解	医師の理解が広がっておらず、実践していくのに難しいのが現状である 看護師間での理解・周知がまず大事だと思う
		教育環境の整備 現在の日本の看護師の教育や実践からはNPの看護実践について、想像しがたいところがある 日本でもNPの実践・教育を増やし、臨床で活躍できるようにしてほしい
NPへの期待	NPが活躍する場	看護師としての活躍の場所が広がっていくことが出来ると感じた 日本では病院からの在宅移行が進んでいるので、在宅でのNPの今後の活躍に興味を湧いた
		医療が不足してきている過疎地ではNPが存在することがとても大切だと思う
	看護師のやりがい	看護師としてのやりがいが広がっていくことが出来ると感じた 看護師の職務満足度における米国と日本の違い

表3 臨床場面での倫理的課題の解決に役立てられたと思ったこと

n=12

カテゴリー	代表的なコード
倫理的課題に気づく	臨床での倫理では、患者と家族、様々な職種の価値対立が起こる
	自身の目線からだけでなく、患者の目線と利益を考えた選択をする必要がある
	日常生活の中に多くの課題に着目するともっと身近に感じられると思った
倫理原則の活用	事例に出会ったときに倫理原則にかえて整理したい
	倫理原則を、日米の違いから背景や文化を顧みて考える大切さを感じた
看護師としての倫理観	所属部署で積極的にディスカッションの機会を設けて倫理観を育みたい
	看護師として責任を持ち判断して実践に取り組むこと
	患者の権利、価値観（文化的・社会的背景含む）を忘れずに患者の話や希望に耳を傾けたい

表4 自分の今後のキャリアを考えるうえで参考になったこと

n=15

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
キャリアの視野の拡大	海外で働くという新たな視野	自分の進路やフィールドに海外、アメリカという選択肢ができた
		看護学科に進んでも、幅広いキャリアが望める事が理解できた
	NPとしての働き方	NPの実際の話を知って自分が目指している看護師像と比較することができた
		NPとして患者に接する看護師としての1つの働き方を新たに学ぶ事ができた
キャリア展望の準備	キャリアを考える方法	まだ就職先も決められていないが、「先を考える」ことの大切さを改めて感じた
		将来の展望をどのように考え、どう行動していけば良いか参考になった
	成功するための準備	「成功するための準備はとても大事」という言葉がとても参考になった
		先を見通して自分に必要な準備を確実にしていきたいと強く思った
	成功するために大切なこと	海外で働く上での文化の違いをどのように乗り越えてきたかを知ることができた
		積極的にチャンスをつかむことが大切であること
		人とのつながりが大切なことを教えて頂いた

IV. 考察

今回、米国 NP でありハワイ大学大学院生でもある講師と日米の看護の現状や課題に関するディスカッションを行い、両校の相互交流および看護教育・研究・実践を推進することを目的とした国際交流プログラムを実施した。プログラム参加者へのアンケート結果では、9 割以上の参加者が米国における NP の役割・看護実践について理解でき、8 割以上が日本における NP の看護実践について考えることができていた。米国 NP に対する知識や情報がない中で、初めて身近な事として考えられたことは、今後 NP の役割を持つ看護師が展開されるにあたり（日本看護協会, 2015）、看護師としてのアイデンティティの形成や役割再考に役立つと考える。本プログラムでは米国 NP と日本の看護の双方の視点を理解する Miura 氏を講師とし、参加者が米国 NP の役割や看護実践をふまえた上で日本にどのように取り入れるべきか考えられるように構成した。参加者のアンケート結果では、日米の背景の違いから日本でのニーズを考える必要性や、日本における NP の専門性を確立する必要性が聞かれており、国際交流プログラムの目標を十分に達成できていると評価できる。

また、NP にはアセスメントや医療的処置に関する看護実践能力だけでなく、倫理的判断の能力も期待されており、本プログラムでは看護師対象に日本の看護における倫理的判断に関して米国 NP の視点を合わせて検討するワークショップを組み

入れた。参加している看護師は、直面している倫理的課題について事例を用いて共有し、米国で倫理的判断の原則となっている「Code of Ethics for Nurses」に基づいて実際に考えていくプロセスを学ぶことができた。アンケート結果では、参加者は臨床場面における倫理的課題の解決方法として倫理原則の活用を挙げており、NP の視点からも倫理的判断を考えられるワークショップ内容であったと評価できる。他にもアンケート結果からは、看護師は文化の違いにより倫理的な価値判断も異なることを学んでおり、外国人患者への異文化看護を学ぶことの重要性が示唆された。先行研究（杉浦, 2003）では、病院看護師は国際的に働く看護師より外国人患者の異文化の背景・価値観を尊重した看護実践ができていないと報告されている。このようなワークショップを通して国際交流を活発にすることで、看護師の異文化理解を促進でき、日本の看護実践の質向上に貢献すると考える。

さらに、本プログラムは看護学生も対象としており、キャリア開発や医療英語をテーマにハワイ大学大学院生・米国 NP の Miura 氏と看護学生の交流を図った。アンケート結果より、参加した看護学生のほとんどがキャリア開発のために参考になったと回答しており、キャリアの視野拡大やキャリア開発のための準備の重要性を感じていた。看護学生の国際交流に関する意識調査（加藤ら, 2018）では、看護学生は語学力や異文化交流だけでなく、見聞を広げることや関心のある専門分野に役立てたいと考えていると報告されており、国際交流へのニーズとして

捉えられる。本プログラムでは日本から渡米してキャリア開発を進めてきた Miura 氏との交流を通して、看護学生は日本にいな
がらも海外を視野に入れたキャリア開発や看護学生に必要な
準備について意識を高める機会になったと考えられる。

利益相反の有無

なし

謝辞

本プログラム実施にあたり、ご協力いただいた Miura 氏、
ならびに横浜市立大学附属病院、横浜市立大学附属市民総
合医療センターの病院関係者の方々に心より御礼申し上
げます。なお、本プログラムは、本学 GCI 公衆衛生ユニッ
トの助成を受けて実施した。

引用文献

American Nurses Association (2015). Preface, Code of Ethics
for Nurses with Interpretive Statements (7-9). Silver
Spring: Nursebooks.org.

グローバル人材推進会議 (2012). グローバル人材育成戦略
(グローバル人材推進会議審議まとめ). <https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf> (2019.10.15 閲覧)

Julie, S.H., Robin, P.N., Kathleen, M.W., Meg, J., Eric, B.B.,
George, Z., ...Jonathan, P.W. (2013). The Quality and
Effectiveness of Care Provided by Nurse Practitioners.
Journal for Nurse Practitioners, 9(8), 492-500.

加藤法子, 鳥越郁代, 吉村美奈子, Ian, S.G., 芋川浩, 許棟
翰, 岡本雅享, 松浦賢長 (2018). 本学学生の国際交流に関
する意識調査. 福岡県立大学看護学研究紀要, 15,
73-82.

公益社団法人日本看護協会 (2015). 2025 年に向けた看護の
挑戦 看護の将来ビジョン ～いのち・暮らし・尊厳を まもり
支える看護～. <https://www.nurse.or.jp/home/about/vision/pdf/vision-4C.pdf> (2019.10.15 閲覧)

厚生労働省 (2017). 新たな医療の在り方を踏まえた医師・看
護師等の働き方ビジョン検討会報告書.
<https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000161081.pdf> (2019.10.15 閲覧)

McGary, C.D., 加藤千博 (2019). 第 19 章 Practical English
プログラムの成果, 佐藤響子 (編), 大学英語教育の質的転
換. 横浜: 春風社.

落合亮太, 松本裕, 大河内彩子, 宮内清子, 塚越みどり, 片山
典子, 渡部節子 (2017). 看護大学 1 年生を対象とした看護

英語教育プログラムに関する実践報告. 横看誌, 10(1),
29-35.

杉浦絹子 (2003). 異文化間看護能力の現状と規定要因. 日
本看護科学会誌, 23(3), 22-36.